日本学校保健学会　第64回学術大会
編集委員会企画シンポジウム
「学校保健の研究力を高める－質的研究でわかることー」
場所：仙台国際センター　　2017年11月5日　9時～10時50分

学校保健領域で
質的研究を始めよう

東京学芸大学・養護教育講座
朝倉隆司

はじめに
質的研究を始めたい方に自問していただきたいこと

- 研究課題、問題意識が、質的研究に適しているか。
- スパーバイザーが身近にいるか。質的研究法は多様なので、柔軟にアドバイスできる人がよい。
- 一緒に取り組める仲間や経験者がいるか。
- 質的研究の世界観は量的研究とは異なる。思考のモードを切り替えられるか、馴染めるか。
- 人間や社会における現象に関心を持ち、心理社会的な背景、文脈を探ろうとしているか。
- 複雑な現象を文脈と切り離さないで捉えたいと思っているか。

さて、社会的現実、人間の行動をどのように見ていますか

- 社会的現実は多様かつ複雑で、同じように見える現象も文脈によって意味が異なり、様々な要素は相互に関連しており、原因や結果という区別をしがたい。（ローカルな文脈ごとの現実の作られ方や意味を探る）

- 人間や社会の行動等は、表面的には異なっているように見えても、本質的には普遍的な法則にしたがっている。（一般化できる法則を探す)

質的研究は、人間性に関わる知見を社会的な実践活動に結びつけるよう、心理学にラディカルな転換を迫る。（イアン・パーカー、ラディカル質的心理学　アクションリサーチ入門、1、ナカニシ出版、2008）

そもそも質的研究は、量的研究（自然科学的科学観）に対する批判から始まっている。

「大きなナラティブと理論の時代はもはや終わった」

生きる社会の多元化、複雑さを増す社会における関係性など、複雑な現象を探求できるのは、質的研究である。

量的研究は、前もって立てた枠組みの範囲を越えられない。実験やサーベイで取り扱いにくい複雑な現象を対象にするのを避けてしまう。

表1　研究法別論文数の推移

発表年	KJ法 1)	グラウンデッド・セオリー・アプローチ 1) 2)	内容分析 1)	ナラティブ 3)	ライフストーリー 4)／ライフヒストリー 5) 6)	現象学 1) 7)	アクション・リサーチ 1)	フィールドワーク 5) 8)	エスノグラフィー 5) 8)	エスノメソドロジーと会話分析 5) 9)	談話分析 5) とディスコース分析 5) 10)	論文数の合計
1990	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1991	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1992	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
1993	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1994	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	3
1995	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	3
1996	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
1997	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
1998	2	0	0	0	1	2	0	1	0	1	0	7
1999	0	0	0	0	7	2	0	2	0	0	0	11
2000	8	1	4	0	13	8	1	0	0	0	0	35
2001	15	7	7	0	8	7	2	0	1	0	1	48
2002	31	16	19	0	20	8	1	2	2	0	0	99
2003	40	15	27	0	20	6	2	5	1	0	2	118
2004	39	20	40	1	14	8	1	1	2	1	1	128
2005	65	37	30	3	19	4	6	2	1	3	0	170
2006	85	42	55	21	21	2	7	12	2	3	0	250
2007	103	59	31	68	22	7	12	3	7	3	1	316
2008	72	59	40	70	24	2	16	4	4	1	2	294
2009	88	86	63	78	26	10	7	6	5	3	2	374
2010	69	90	74	96	26	6	3	4	5	1	0	374
合計	618	432	390	337	223	75	58	51	31	17	9	2241
%	27.6%	19.3%	17.4%	15.0%	10.0%	3.3%	2.6%	2.3%	1.4%	0.7%	0.4%	100.0%

質的研究法の多様さ。
目的に沿った方法を選ぶ。

［招待論文］

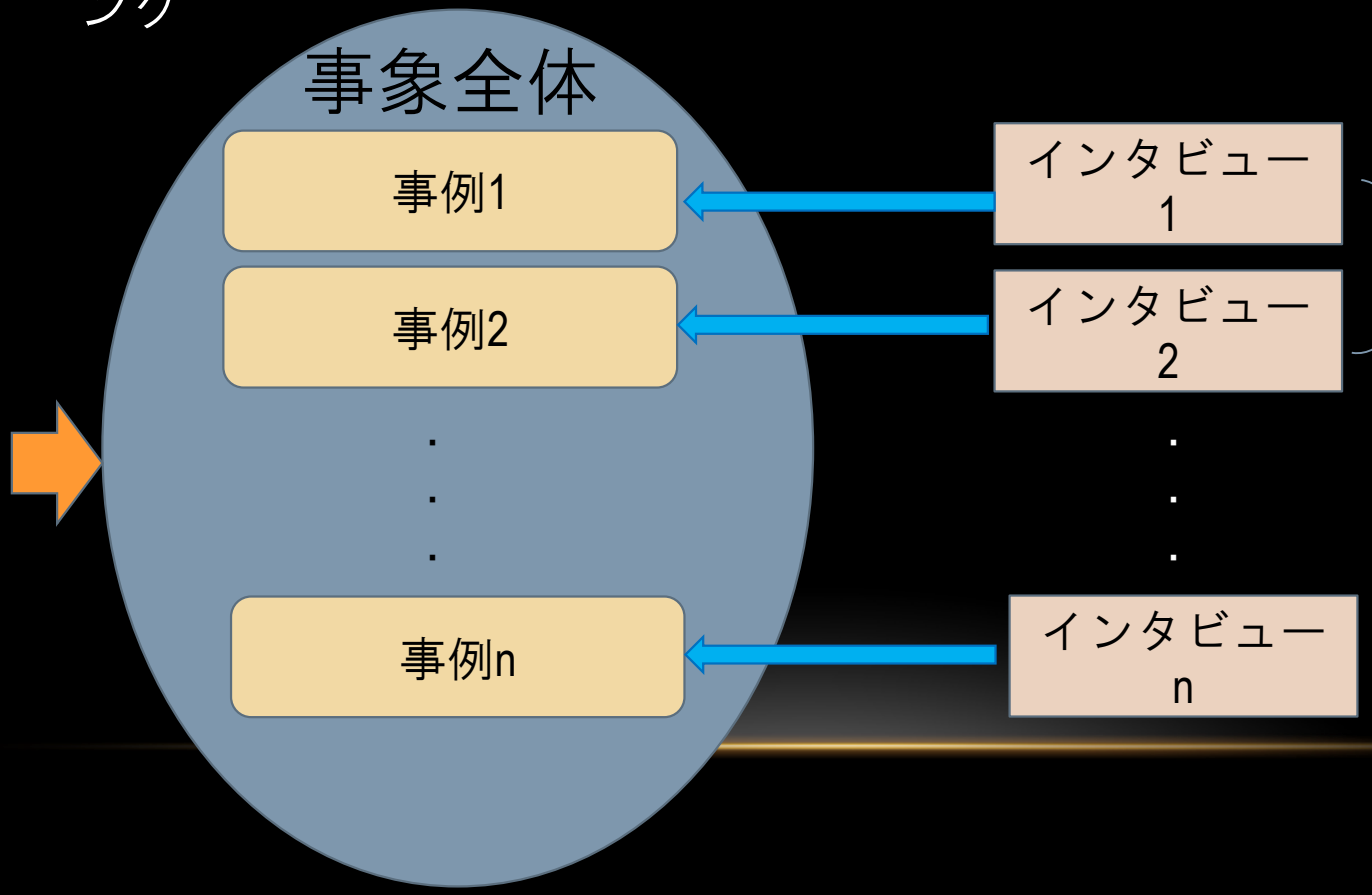
グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論

Overview of Grounded Theory Approach

戈木クレイグヒル 滋子
慶應義塾大学看護医療学部／健康マネジメント研究科教授
Shigeko Saiki-Craighill
Professor, Faculty of Nursing and Medical Care, Graduate School of Health Management, Keio University

たとえば、質的研究のイメージ（M-GTAの場合）

包括的に現象を探求するため、
適切な対象者を幅広くサンプリング



問題とする現象の設定

データの分析・比較と質問の修正を繰り返す。

データ分析から新しい概念が出てこなくなったら終了。

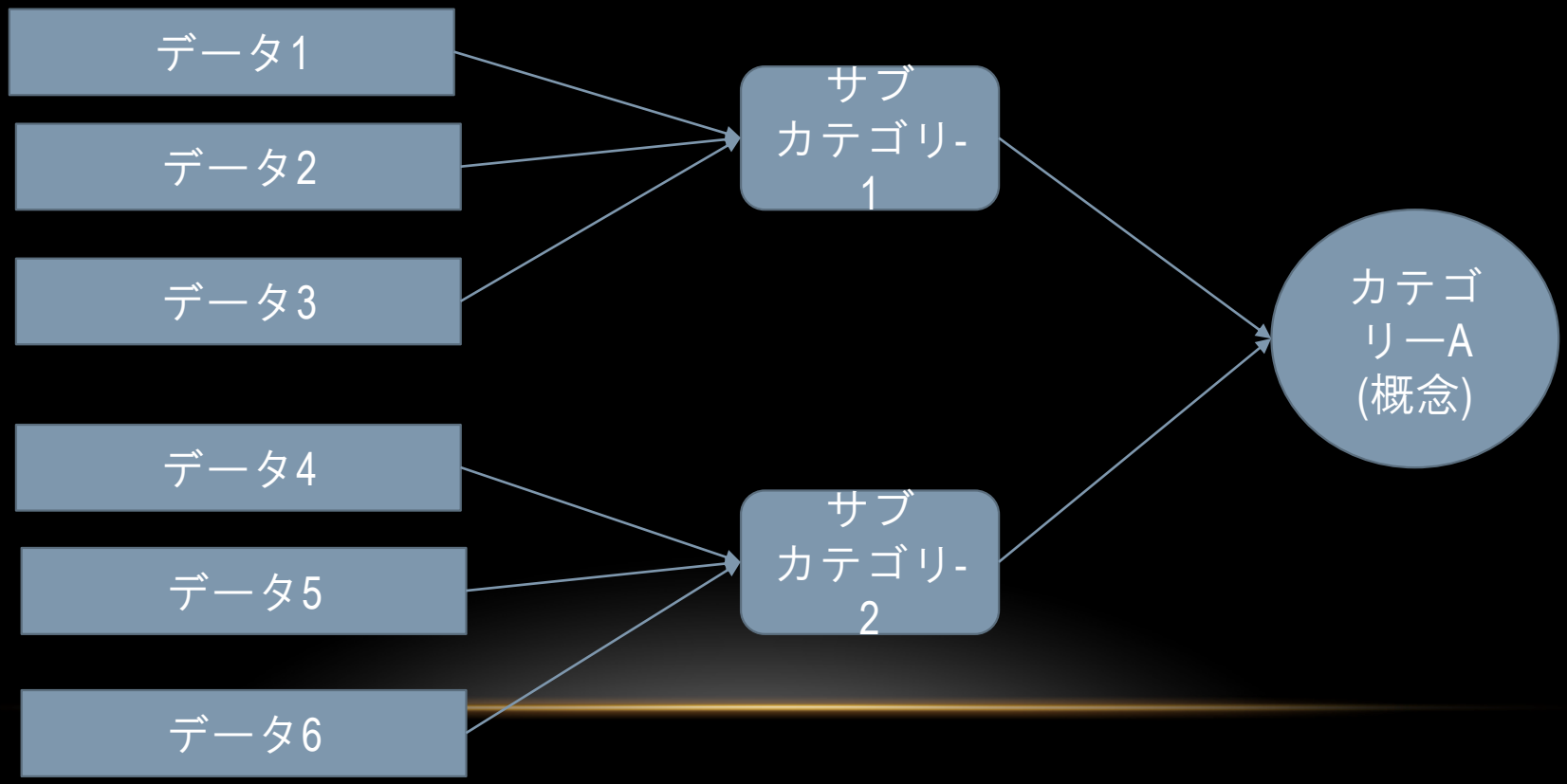
質的研究の意図的サンプリング

意図的サンプリング

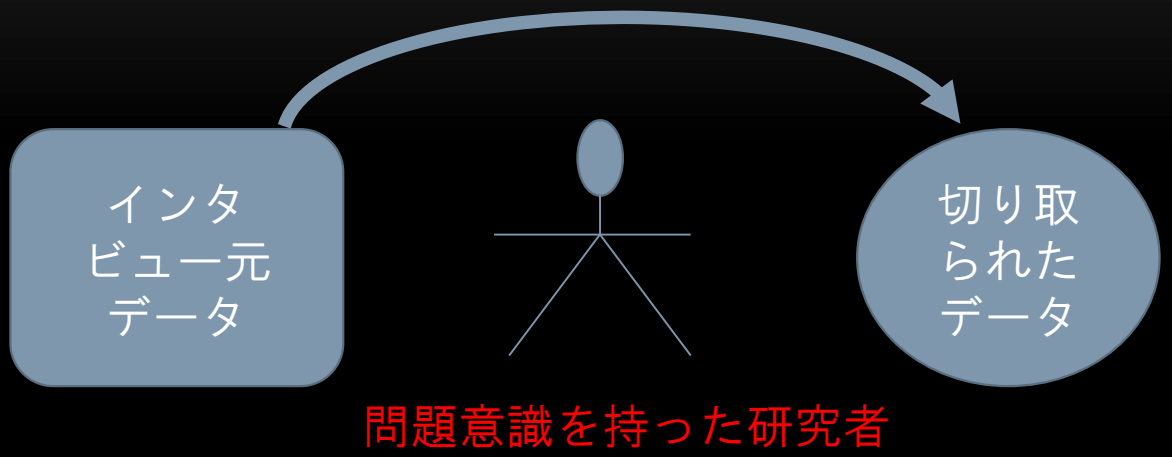
問題とする現象が良く理解できるような個人や組織等のケースを、調査者が意図的に選ぶ方法

- 理論的サンプリング
  調査者が、ある理論を構成するのに役立つ下位の理論や概念を発見できそうなケースを意図的に選択する
- マキシマム・ヴァリエーション・サンプリング
  （maximum variation sampling)
  問題とする現象のある次元について、できるだけ広くカバーするために、できるだけ多様なケースを選択する

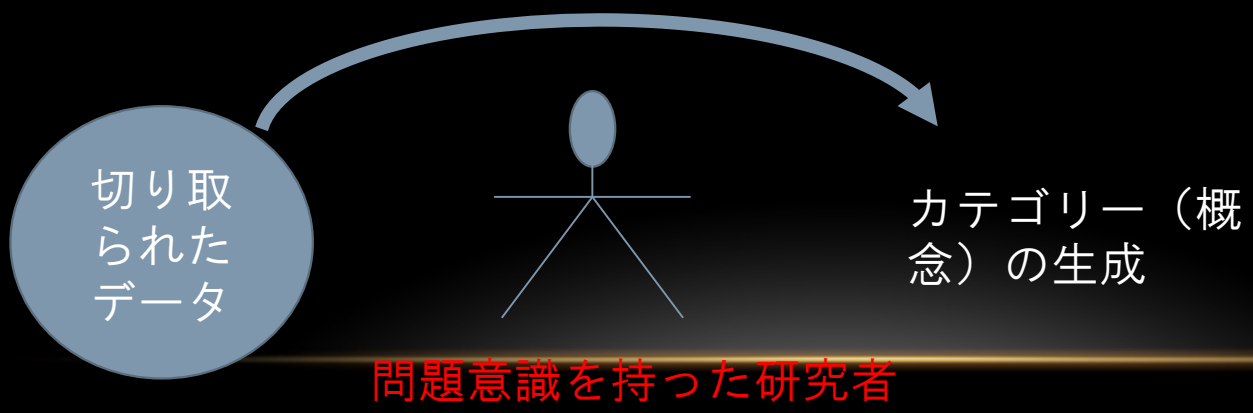
データの抽出とカテゴリーの生成



データから概念生成へ：
研究する人の問題意識を通して生成される



「問題意識を持った研究者」は良くトレーニングされている必要がある。



木下康仁「ライブ講義　M-GTA」2007を参照

プロセスを説明するストーリーライン

- ストーリーラインとは
  生成した概念とカテゴリーを相互に関連づけて、分析結果を簡潔に文章化して、問題とした現象のプロセスを説明したもの。

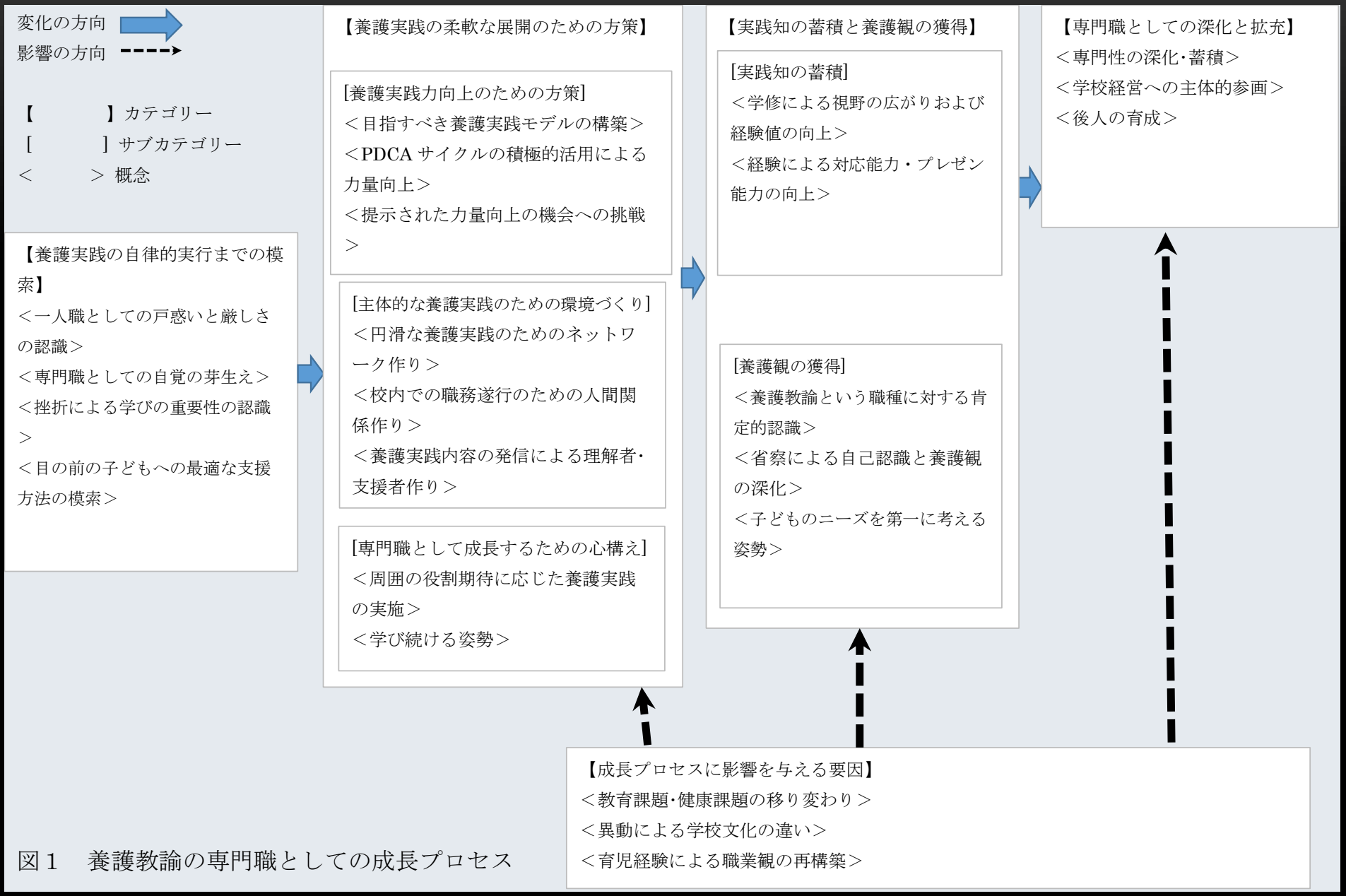


図１　養護教諭の専門職としての成長プロセス

講演を始めるにあたって

- 「質的研究は、研究者の数ほどある。」
（方法的なバリエーションの多様性）
- 私個人の考えに基づいている。
- 本講演の「答え」には意味はないかもしれないが、「問い」にこそ意味がある。
- 質的研究への探求心が触発されれば幸い。
- 質的研究のプロセスは、社会的現実（問題意識)の取り上げ方、対象の選択、探求の方法と分析、解釈、考察が互いに関連しているので、前後したり、循環しながら進行する。本報告も、前後し、循環する。

根源的な問題意識をもつ

- どのようにしたら人は健康に生きられるのか？
- 人が健康に生きられる社会とはどのようなものか？

この二つの疑問を探求するのが、私が研究する目的。

- この大きな問題意識を具体的にブレイクダウンしていくと、量的研究の課題にもなれば、質的研究の課題にもなる。質か量かではない。
- 重要なのは、設定した研究テーマが、この二つの疑問にどのように関連しているか、自分自身に対して説明できること。質的でも量的でも、人間と社会を研究する上では全ての能力と感覚の投入を必要とする
- 研究のコツがあるとすれば、ブレイクダウンの仕方。

質的研究に注目した個人的背景

- どうして質的研究に興味を持ったか
  社会調査の経験・精神保健のトレーニング
  保健師の地域精神保健活動のプロセス分析
  シカゴ学派(人間生態学・都市生態学)
  慢性疾患患者の生活構造の再編成過程の探求
  がん患者のサポートグループ、ナラティブ・ターン
  （看護学研究者との共同研究)
- 社会学(健康社会学)・社会構築主義/社会構成主義
  健康観の転換（園田恭一・川田智恵子、東京大学出版会、1995)
- 新しい学問領域の生成、生活・経験とケアへの注目

質的研究の根底にある二つのキーワード

ナラティブ

社会構築主義/社会構成主義

ナラティブ・ターン（物語的転換）

- 人々がその生活、人生のなかで絶え間なく行っている意味生成のプロセスの探究を、当事者（研究対象者と研究者）の視点から可能にした（どのように体験し意味づけたのか、主観的理論の生成）
- ナラティブの構造を通し、その背景にある社会・文化的背景を理解できる(なぜ、それが起きているのか、意味が生成されるプロセスと維持する構造）
- 新しい語り(物語)、別の語り(物語)が生成される可能性の探究（主流の物語の相対化、新しい理解）

ジーン・クランディニン（アルベルタ大学）のナラティブ・インクワイアリー

　あとどのくらい続けられるか、心配だし悩みます。だってほら、希望はあるんだけど、今のところ何に変化も実際には感じられないから、本当に希望を持っていいのかどうか、足元から不安になるんですよ。だから、もし5年後も今と同じような状態だったらまだ私は教師を続けられるだろうか、と考えてしまう。わからない、と思います。何か私を教師の職に踏みとどまらせるものってあるんでしょうかね。（カナダの教師・2年目）

- 出発の問いは、「教育歴5年未満で退職する教師たちの経験について探求することで、教師教育についてどのようなことを学び取ることができるのだろうか？」システム？待遇？資質？個人の問題？
  ナラティブを通して問いは「何が私を教職に踏みとどまれるようにするのか？」へと深化した。
  （ジーン・クランディニン、教師の＜物語＞を支えとする：教師教育への提言、東京学芸大学2017年10月19日講演）
- 個人的な知識の風景と専門的な知識の風景が折り重なって生活（lives）が成り立っている。pedagogical skillの問題ではなかった。

社会構築主義/社会構成主義

- 一見確固とした実在のように当事者に思われている事象（たとえば、性差、伝統、文化、歴史、国民性、自己など)を社会的に形成されたもの(結果）と捉え、その(形成の）過程を分析する立場。
- 調査対象者ないし研究者によって形成された現実といった意味である
- ＜構築＞が空間的であるのに対し、＜構成＞は時間的意味合いをもつ。
（ウヴェ・フリック、新版　質的研究入門、＜人間科学＞のための方法論、645、春秋社、2011）

なぜ質的研究か

- 質的研究法で探求しなければならない理由は何か。
  探求する（研究対象となる)現象の特性
  「理論」から入るか、「事象」から入るのか。
  どのような世界観、科学観に基づいて現象を見るか、学問(知識)を構築するか
  量的研究との違い

- 質的研究だからわかることは何か。
  質的研究法の特徴

ところで研究をどのように始めているのだろう

いろいろなタイプがある。

- 現実の事象から（こんなことが起きている）
- 研究方法から（この方法、分析をやってみたい）
- 文献・先行研究から（こんな研究テーマに取り組んでみたい）
- 基本的な問題意識から（ライフワークとして取り組むテーマ）
- 周りの要請から（こんなことを調べてほしい）

(略)われわれは、限られた資源を割り当てる優先順位を決める医療・社会政策をあみださなければならない。われわれには、病気とその社会的影響を示す確実な経済的指標が必要である。たしかにDALYは、医療改革や健康行政にとって役立つであろう。しかし、合衆国における医療改革にかんする最近の議論の多くに見られるように、経済的指標のみを苦しみの唯一の尺度としてはならない。矛盾する要素もある複雑な人間の苦しみを表すためには、これらの経済的指標とともに、ナラティブ、民族誌、社会史などをもちいる必要がある。それらをもちいずに経済的指標のみで苦しみをはかろうとすれば、世界の各地域の人々にとって何が死活的問題なのかをとらえ損ねてしまうであろう。

（A.クライマン他、他者の苦しみへの責任　ソーシャル・サファリングを知る、20-21、みすず書房、2011）

事象から始める

- 質的研究者は、世界や人々が生きる世界（文脈依存的でローカルな「現実」）の多元性と多様性、社会・文化的環境や時間によって変化する「現実」に関心を持っている。

ローカルな理論、多様な物語、変化の物語、オールタナティブな物語を求める傾向が強い。

（やまだようこ、質的研究の核心とは、無藤ほか編「質的心理学　創造的に活用するコツ」、8-13、新曜社、2008）

- 「ある種の質感を持って立ち現れてくる独特な世界」

(で起きていること)を、できるだけ損なわないで捉える。

（伊藤哲司、みる、きく、しらべる、かく、かんがえる、北樹出版、2009）

質的研究の特徴（だからわかること）

- 自然現象ではなく社会的現実を扱う
- 一般性より個別性や特殊性に着目
- 脱文脈化された知識ではなく、ローカルな文脈と関連した知識
- 平均化された像ではなく、多様性に富む全体像、多元的な現実
- 社会現象における矛盾、相違を取り上げる

さて、学校保健の対象となる社会的現実には、どのようなものがあるでしょう？

- 病気や障害のある子どもは学校でどのように生きているか、教員や周りの子どもはどのようにかかわっているのか。（在り様）
- 養護教諭は、養成課程からベテランに至るまでに、どのようなキャリア発達をしていくのか、どのようなタイプがあるのか。（変化、プロセス）

学校保健の研究の対象の特徴

- モノの世界（自然科学的：物理、化学、生物学）
  たとえば、教室・保健室という空間（物理的環境）
  けが、病気、障害など児童生徒の医学・生物学的側面
- コトの世界（精神・心理、社会、教育、法律、経済、文化、歴史など）
  学校・教室・保健室という空間で教員・養護教諭と児童生徒が相互にかかわる
  文脈(体験や意味のある世界)がある（競争社会、学校文化、地域社会、家庭生活など）
- 文脈のない空間と、ある文脈における空間は、研究対象として意味が異なる。
- 学校、教室、保健室という場で，モノの世界とコトの世界が相互に関係し合って生じる「現実」が、学校保健の研究対象のひとつの特徴

エビデンスと質的研究

RCT(RANDOMIZED CONTROL TRIAL)が最良のエビデンスか

エビデンスとは何か

　　エビデンスの次元

　　臨床的判断のエビデンス

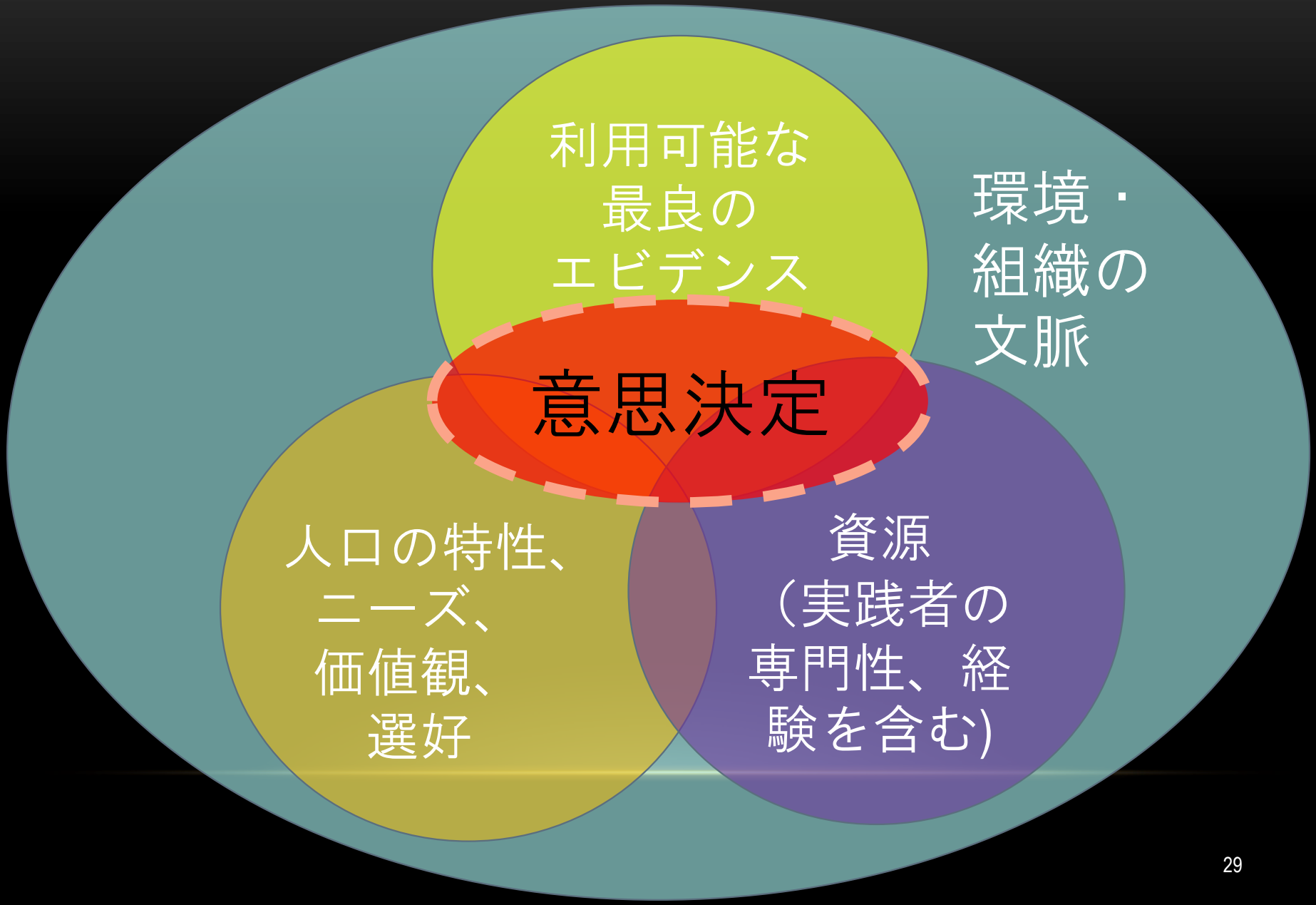
科学的認識の違い・二つの科学

エビデンス主義に陥らない

- RCT(無作為化比較試験）がより良いエビデンスか？
- システマティックなレビューの結果が最も良いエビデンスか？
- 観察研究が現実的で、最も適切な場合。
個々の臨床では、経験、専門性、対象者の価値観の総合的判断が必要なこともある。

Satterfield JM et al. Toward a Transdisciplinary Model of Evidence-Based Practice, Milbank Q. 2009 Jun; 87(2): 368–390.

エビデンスに基づく意思決定に影響を与える領域



- 医療や健康ケアに関する行為、健康行動、政策における意思決定は、自然科学的な医学のエビデンスのみに基づくわけではない。
- 人文社会科学によるエビデンスがあってよい。

どのような世界観、科学観に基づいて“現実”を見るか、学問(知識)を構築するか

- 実証主義の精神（合理性）
- 解釈主義の世界観（多義・多様性）

C.P.スノー：「二つの文化と科学革命」みすず書房

実証主義（自然科学的）----量的研究

- 事実・真理は現実に存在する。（実在性、普遍性）（正解がひとつ）
  現実に起きている事象は
- 明瞭で系統的な方法を用いて、詳細に観察できる。（観察可能性）
- 必ず原因があり、因果関係を証明できる。（合理性）
- 測定されたデータで、証明できる。（実証性/再現性）

解釈主義（人文社会科学的）----質的研究

社会的現実とは

- 客観的に実在する唯一ものではなく、観察者の観点や期待により異なる（非実在性）
（答えは幾通りもある）
- 解釈や理解に依存する。
（相対的、多義的、主観的）
- 社会的に構築される。（社会構築主義）
- 不変ではなく、移ろいやすい。（可変性）
- 矛盾をはらんでいる。（非合理的）

質的研究

- 特定の個人の認識、態度、行為などの社会的な相互作用を問題にし、理論の探求や意味の探求を行う。

どんな体験をし、
どう意味づけているのか？
現象はどのようなプロセスをとるのか？

量的研究

- 現象の量的記述（発生頻度・割合、分布、比較）
- 原因（要因）の推測、理論化（統計的モデル）
- 一般化、普遍化

- 量的調査、量的データの分析に必要な力
  - 実証可能な疑問・問題意識を持つ力
  - 分析的な思考力
  - 測定可能な要素（本質）に単純化する力
  - 論理的、合理的に再構成する力

- 質的調査、質的データの分析に必要な力
  - 現象を多様な角度から解釈する力
  - 様々な現象から本質を抽象化する力
  - 意味あるストーリーを再構成する力

方法としての質的研究

- 質的研究は万能ではない
- 妥当性、主観性等の問題
  方法としての厳密さをどこまで求めるか（厳密な方法は可能か）
  研究者の姿、協働性、
  主観的という批判（客観性のレベル)
- 再現可能性(信頼性)を求めるべきか
- 量的研究の遂行と異なるループ（循環型）
- 質的研究が触発するもの
- 量的研究と質的研究は補完的か
- 混合研究法の可能性

質的研究をめぐる
客観性、信頼性、妥当性の問題

フッサールの現象学より

- 全ての現象の確かさ（リアリティ）を、主体が信憑だと認識する程度や範囲の問題に帰する（間主観性の成立の問題）。

  1)個別な主観的確信（個人内）
  2)共同的な確信（複数の人間の間）
  3)普遍的な間主観的確信(自然科学）

- 限定された範囲内で成り立つ共同的主観(限定的な間主観性)を目指す研究

小林隆児、西　研編著、人間科学におけるエビデンスとは何か、新曜社、2015

信頼性

- 量的な研究での信頼性（再現性）は、ある現象の測定結果や観察が、時間の経過の中で安定していることを指す。この前提となるのは、研究対象とする現象は時間的に変化してはならないということ。
- しかし、質的研究では、異なった研究者によって用いられる異なった方法からいかに多様な視点が得られるかの方が、重要である。
- 質的研究者のトレーニングと、研究プロセス全体にわたって常に反省し、それを記録にとどめることが重要。
（ウヴェ・フリック、467-470、2011）

妥当性

- ある方法論に基づいた判断基準の適用は、その体系の枠内に研究が留まることになる。
- 質的研究の妥当性は客観的な外的基準との対応などではなく、研究という営みそのものの中や、研究結果が公表され研究者間で共有されていくなかで妥当性が確認されていく(妥当化プロセス)。
- 研究の個別部分ばかりを見るのでなく、より視野を広げて研究プロセス全体の透明性を増そうとする傾向にある
- メンバーチェックの方法は、調査対象者個人の見方を超える解釈（分析）を行おうとすると、妥当性の方法としては適切とはみなせない。

私が大切にしている観点

- 主たる研究者、共同研究者、対象者が共に作り上げている研究か。
- 研究者がその現象を良く理解しているか、対象者から学んでいるか。
- 直感や理解に反しないか。
- 対象者の実感からはずれていないか。
- 個別を越えて、より広い理解と説明を探求するので、対象者との見解の不一致や矛盾も大事にする。
- 他の研究者の知識や直感と一致するか。理解や思索を深めるか。触発するか。
- 説得力があり、ものの見方、理解・説明の仕方を変える新しさがあるか。

質的研究の特長

- 多様性に富み複雑で、変化する社会現象を、できるだけそれが生じている文脈（ありのままの生活世界)と切り離さないで研究対象にすることができる。

質的研究らしい問いを立てられるか

- 状態の記述を目指す研究設問
  どうなっているのか？
  （例）どんなタイプ、どんな構造、どんな原因、どんな帰結、どんな戦略か。
- プロセスの記述を目指す研究設問
  どのようになってゆくのか？
  展開や変化
  （ウヴェ・フリック、2011）

理論形成をめぐって

- 理論形成は可能か
- 研究成果を活かす共同関係性
　研究は、研究者のみでなく聞き手との協働作業

固定的イメージとしての理論

- 科学研究において個々の現象や事実を系統的に説明し、予測する力をもつ体系的知識。
- 狭義には、明確に定義された概念を用いて定式化された法則や仮説を組み合わせることによって、形作られた演繹体系。

プロセス性、可変性を持ったイメージとしての理論

- グレーザーとストラウス流の研究プロセスにおける理論とは、世界のバージョンである（ウヴェ・フリック、2011）。世界のバージョンとは、我々に世界を見る視点を提供してくれるもの。それを通して世界の現象が知覚され、獲得された知覚が逆に世界への視点を社会的構築する、というプロセスが循環する。
- 世界のバージョンを作ることがひとつの理論化の在り方だが、それは暫定的で相対的なものである。新しい、矛盾する情報を取り入れて作り変えていくのが質的研究の役割。
- 出発点は、研究対象に対する先行的理解であり、白紙ではない。
- 修正に対し開かれている。根拠は質的データである。

質的研究法をどのように学ぶか

- 社会調査法（授業・研究補助)と構造化・半構造化面接を学部・大学院生時代のトレーニングと研究で経験を積む
- テキストで学ぶ（授業で講読する)
- 学生・院生指導を通して教えながら学ぶ
- 共同研究を通して学ぶ
- 講師を招いて学ぶ(研修会)

参考テキストの例

- 戈木クレイグヒル滋子、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、新曜社、2006
- 木下康仁、ライブ講義M-GTA　実践的質的研究法、弘文堂、2007
- 木下康仁、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　質的研究への誘い、弘文堂、2003
- 佐藤郁哉、フィールドワーク増訂版　書を持って街へ出よう、新曜社、2006
- 藤田結子、北村文編、現代エスノグラフィー　新しいフィールドワークの理論と実践、新曜社、2013
- キャロル・ガービッチ、保健医療職のための質的研究入門、医学書院、2003
- 萱間真美、質的研究のピットフォール　陥らないために　抜け出るために、医学書院、2013
- やまだようこ編、質的心理学の方法　ー語りをきくー、新曜社、2007
- 伊藤哲司、みる　きく　しらべる　かく　かんがえる　対話としての質的研究、北樹出版、2009
- ウヴェ・フリック、新版　質的研究入門　＜人間の科学＞のための方法論、春秋社、2011

質的研究論文の良し悪しの判断

- 良い質的研究論文、問題となる質的研究論文
- 質的研究論文のガイドライン

質的研究論文のチェックリスト

日本健康相談活動学会誌　Vol. 10 No. 1 2015

表１　著者と査読者のための質的研究論文のチェックリスト

はじめに

- ☐ 研究疑問が明確に記述されている
- ☐ 研究疑問の正当性が示されており、既存の知識体系（経験的研究、理論や政策）と関連付けられている
- ☐ 原稿で後に述べられる、本研究に特有な用語や教育用語が定義されている
- ☐ 倫理的な同意や研究機関等の研究倫理委員会の承認が得られたプロセスを記述し、引用している

朝倉隆司、質的研究論文の書き方のヒント、
日本健康相談活動学会誌, 10(1):
13-20http://hdl.handle.net/2309/139331
を参照。

方法

- ☐ 特定の研究方法を選択した理由が記述されている
- ☐ 研究への参加者を選択した基準が説明され、その正当性が述べられている
- ☐ 対象者をリクルートした方法が明確に記述されている
- ☐ 研究にどのような人が参加しないと選択したか、それはなぜか、詳細が示されている
- ☐ 研究のサンプルと研究の場（セッティング）の特性が記述されている
- ☐ 参加者からインフォームドコンセントを得た方法が記述されている
- ☐ 対象者の匿名性と秘匿性の保障について記述されている
- ☐ データの記録の方法（たとえば、録音や録画）とデータを文字に起こす方法が記述されている
- ☐ 方法の概要が記述されており、例示がされている（たとえば、インタビューガイド）
- ☐ データ収集を終わらせる決定について説明されており、正当性が述べられている
- ☐ データ分析とその検証について、誰がその分析を行ったかを含め、説明されている
- ☐ データからテーマと概念を見つけ出したり、推定する方法が説明されている

結果

- □ 読者に、解釈がデータによって支持されるか否かを評価するだけに足る、十分なデータを提示している
- □ 中心的な解釈に適合しない周辺（外れ）の事例や否定的あるいは逸脱した事例が提示されている
- □ 研究結果を他の場（セッティング）に適用することが可能か、考察されている
- □ 同様の先行研究や社会理論の文脈に位置付けて、結果が提示されている

考察

- □ 考察は、質的研究論文ではしばしば結果の中に組み込まれている
- □ 既存の文献からの考察とこの研究がどのようにこの分野に貢献するのかが、含まれている
- □ この研究の独自の強みや限界が考察されている
- □ 研究者がどのようにして結果にバイアスを与えた可能性があるかに対する考察など、研究者がデータに与えている影響に対する省察を含んでいる

結論

- □ 結論は、この研究の主たる結果を述べ、この研究が当該分野においてどのような新たな知見を加えたかを強調する

注）Anderson C. Presenting and evaluating qualitative research, American Journal of Pharmaceutical education 74(8), 1–7, 2010に掲載されているチェックリストを著者が意訳したものである。

おわりに：
協働実践型研究への展開
研究者が深く関与する実践的研究

- 現代的な学校保健の課題の解明と解決に向けた研究者と実践者の協働実践型研究の開発（協働実践性の構築)
  参加型
  協働的主体性（アクション・リサーチ)
  （互いの主体性を失わず、協働する研究；協働する中で互いの主体性を構築する）
  柔軟性の高い複合的な研究デザイン
- 研究に開かれた教育現場